
東京藝術大学
環境報告書

2023



Tokyo University of the Arts

Environmental Report

2023



目次

1 学長挨拶	03
2 藝大SDGs	04
3 組織体制	05
4 施設概要	06
5 環境に関する取組み	08
6 マテリアルバランス	11
7 施設長寿命化への取組み	14



1 学長挨拶

東京藝術大学は、SDGs推進活動の一環として環境負荷の低減及び自然環境の維持・保全に向けて取り組んでおり、本報告書は本学の環境活動の現状及び問題点や課題を広く公開し、本学の学生・教職員が、地域社会や企業とともに環境問題に継続的に取り組むことを目的として作成しています。

本学は、芸術の力で人の心を動かし、社会や地域に対して貢献すること、そしてウェルビーイング＝人々の生活をよりよくしていくことを目指して活動をしています。そのためには、私たちの日常の意識と行動を変えていく必要があります。そしてそれを継続的に進んでいくためには、数値目標を義務的に達成するだけでなく、心の底から「そうしたい」「そうありたい」という気持ちがなければなりません。ひとりひとりが自分自身の目標として継続していくことが重要なのです。

SDGsの17のゴールには「芸術」という言葉はありません。しかし、人の心を動かすことは芸術の成せる技であり、すべての目標の達成プロセスには必ず芸術が接続しています。真ん中の部分がにじんでいる藝大SDGsのロゴのビジュアルには、多様で移ろいやすい人の心と、その心が動くことによって行動変容が促される、そういう意味が込められています。



東京藝術大学は今後も、環境改善をはじめとするSDGsの目標の達成に貢献できるよう、また貢献できる人材を育成できるよう、教職員、学生、地域の方々やステークホルダーのみなさんと共に、よりよい未来を築いていくための活動を継続して参ります。



令和6年2月

東京藝術大学長 日比野 克彦

2 藝大SDGs

本学は、環境負荷の低減及び自然環境の維持・保全に向け、SDGs推進室の元に環境系専門委員会を立ち上げ、継続的に取り組んでいます。以下は本学におけるSDGs（Sustainable Development Goals）への基本的な考え方です。



藝術は、ずっと前からSDGs。

そして、今こそ、

疑い、問い、変革する。

人を愛し、心を打ち、社会を動かす。

世界を幸福にするイノベーションとして。

- 東京藝術大学は、SDGs が掲げる社会変革に貢献します。
独創的な視点からイノベーション生み、人の心を動かす藝術の力によって
- 東京藝術大学は、社会との結びつきを強化します。
SDGs を共に目指すことで新たな連携の広がりを
- 東京藝術大学は、持続可能な大学を目指します。
学内の自然の“美”と多様性の“鮮やかさ”を守ることで
- 東京藝術大学は、藝術と社会の架け橋となる人材を育成します。
藝術によって社会課題の扉を開くことを目指して

SDGs が掲げる 17 の目標の中に、「芸術」の文字は、ひとつもありません。それは、17 の目標すべてに藝術が接続すべき必要と出番があるということ。

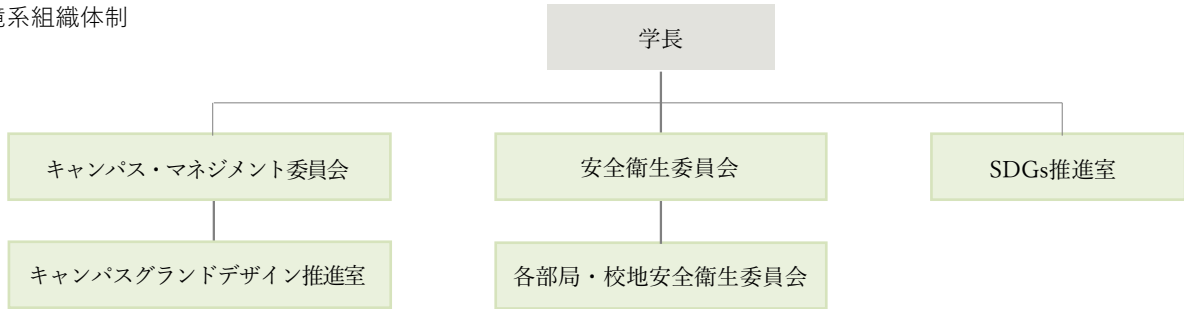
大量生産・大量消費・大量廃棄が引き起こす地球の悲鳴。そして貧困、差別、暴力による人間の悲鳴。すべてのアーティストたちは、遥か以前から、その悲鳴に心に向け作品を生み続けて来ました。ダヴィンチも、ベアトリーチェも、ピカソも、シュパンも、黒澤明も、バンクシーも。

藝術活動は、人間が人間たる所以。そして人間はこの10年で、既存の価値観を大きく転換させなくてはなりません。

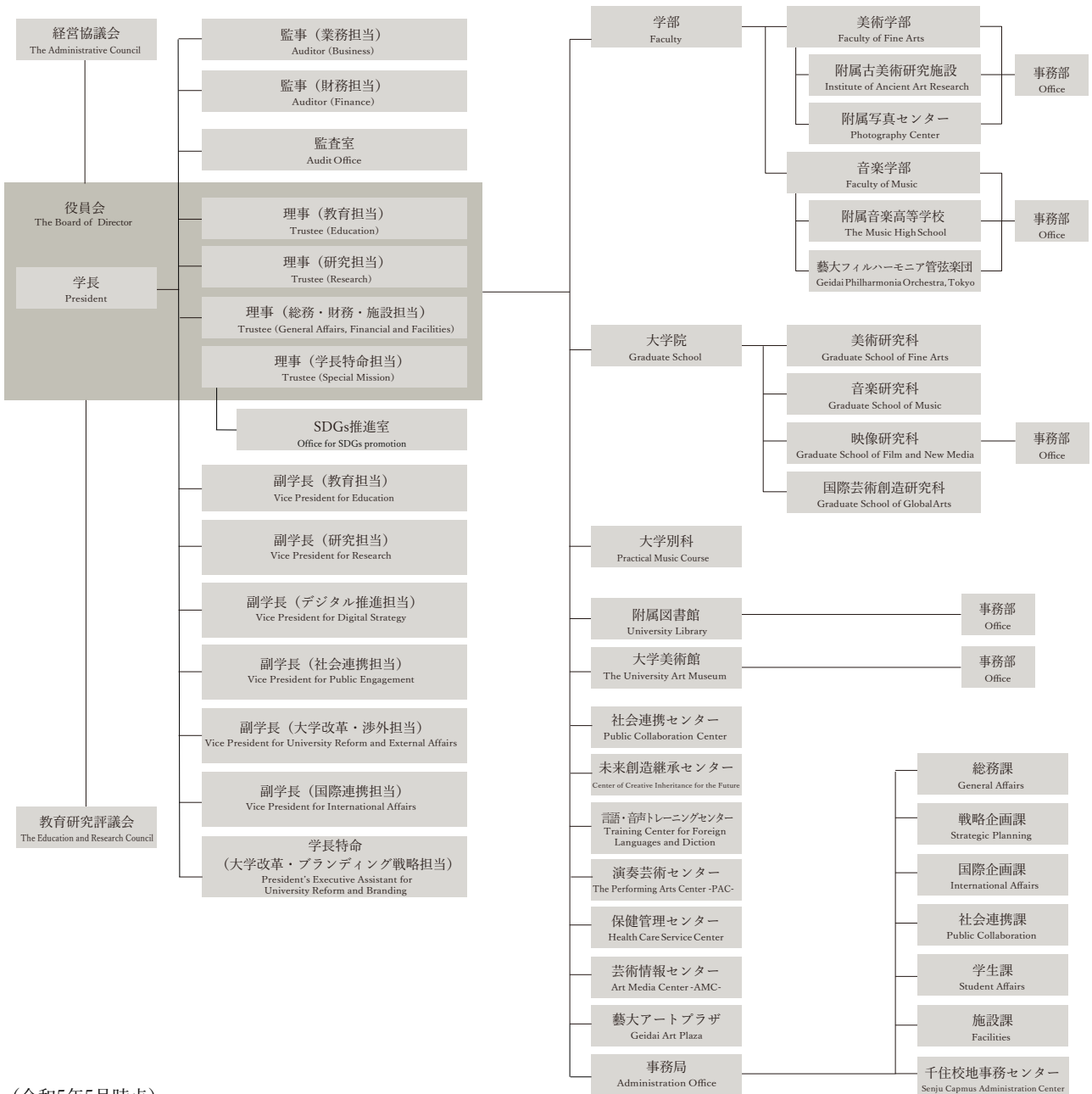
社会変革の種を“藝”える“術”を持つ東京藝術大学。「世界を変える創造の源泉」として、豊かで幸福、持続可能な社会を実現する役割を果たします。

3 組織体制

環境系組織体制



本学の組織体制

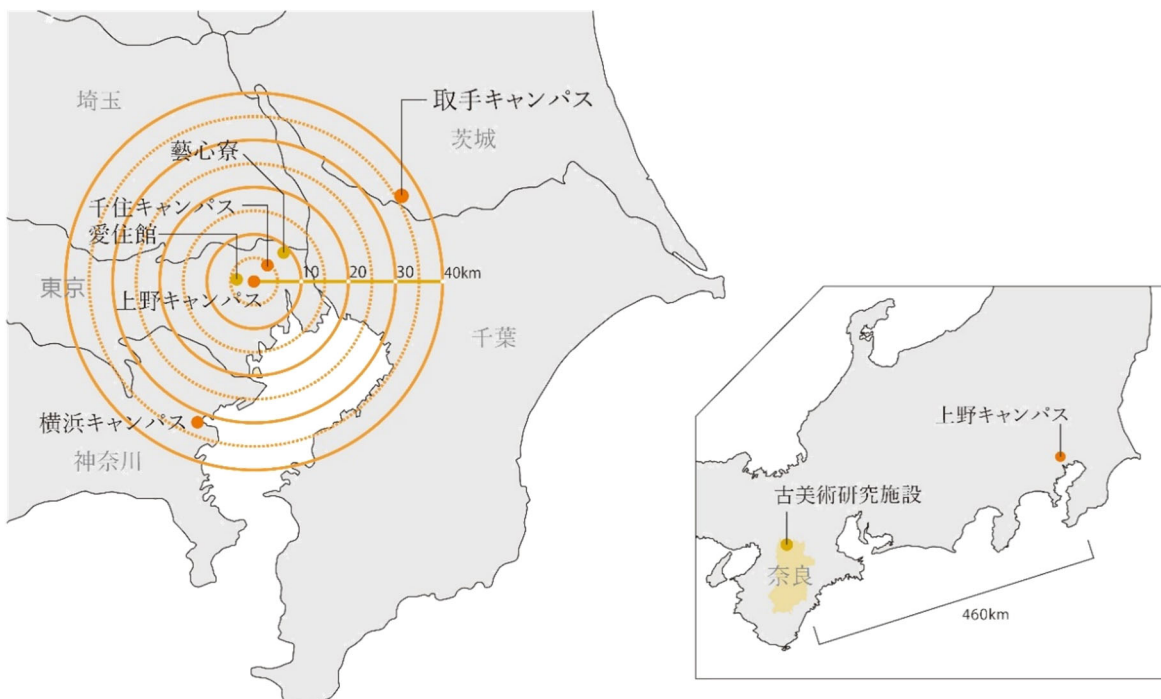


(令和5年5月時点)

4 施設概要

● 上野キャンパス [東京都台東区上野公園内]	美術学部 大学院美術研究科 音楽学部 大学院音楽研究科 大学院国際芸術創造研究科 各附属機関・センター等 事務局本部	在学者数 2,769名 (84%) 教職員数 352名 (84%) 敷地面積 69,365 m ² (28%) 延床面積 96,463 m ² (74%)
● 取手キャンパス [茨城県取手市]	美術学部 大学院美術研究科 各附属機関・センター等 取手事務室	在学者数 252名 (8%) 教職員数 23名 (5%) 敷地面積 164,095 m ² (67%) 延床面積 20,341 m ² (16%)
● 千住キャンパス [東京都足立区千住]	大学院音楽研究科 大学院国際芸術創造研究科	《計》 2学部14学科4研究科 在学者数 3,316名 教職員数 419名 敷地面積 244,012 m ² 延床面積 131,224 m ² 藝心寮（学生寮）は除く (令和4年5月時点)
● 横浜キャンパス [神奈川県横浜市]	大学院映像研究科	
● 美術学部附属古美術研究施設 [奈良県奈良市] ● 愛住館 [東京都新宿区]		

4つのキャンパスと3つの附属施設の位置関係





上野キャンパス鳥瞰図



取手キャンパス鳥瞰図 (「東京藝術大学キャンパスマスタープラン2020 取手キャンパス編」 「将来イメージ」より)

5 環境に関する取り組み

1 取手キャンパスでの持続可能な制作活動の取り組み

美術学部工芸科において、取手キャンパスの自然にある資源を利用した、持続可能な作品制作の試みがされています。

◆取手キャンパスの土を使用した窯

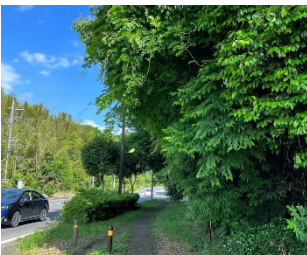
取手キャンパスでは伝統的な登り窯や学生たちが自らの手で作り上げる窯など、様々な窯を使用して作品の制作活動をしています。その中には、取手校地の土で作られた窯があり、制作活動の中で自然に身近に資源循環を体感することができます。



・取手の土で作られた穴窯。学生や教員からは「むかで窯」という愛称で呼ばれている。

◆工事等で排出された資源を材料として使用した作品制作

現在取手キャンパスでは、大学美術館取手取蔵棟建設工事を実施しており、工事エリアの掘削に伴い残土が排出されました。また、豊かな自然に囲まれた取手キャンパスは、構内安全の観点から定期的に成長しすぎた樹木の剪定をしているため、間伐材が発生します。このようにして発生した残土や間伐材は、通常産業廃棄物として処理されますが、資源として作品制作に利用する試みが進められています。



・取手キャンパスの成長しすぎた樹木



・剪定・間伐された樹木。乾燥期間をおいたあと、陶芸窯の燃料や作品の材料に使用される



工芸科陶芸の三上教授を中心に、工事にて発生した残土（＝取手の土）をどのように制作活動に活用できるか、土質のテストなどを重ねています。やきもの・陶芸のみならず、アート制作全般的に広く利用できないかを含め、取手の土の可能性を模索しており、2023年世界展開力強化事業+Shared Campusのキックオフプログラムでは、取手の土を濾して泥石験を作るワークショップを開催しました。

更に取手の土を使いやすくするため、同じ茨城県内の素材である稲田石(笠間長石)との配合をテストするなど、地産地消の取り組みも併せて行われています。

取手の土でできた窯で、間伐材を燃料とし、取手の土を材料とした作品を制作する、循環型の制作現場の実現へ 試行錯誤が続きます。



・工事で発生した残土



・泥石験のサンプル



・取手の土と笠間長石を材料とし、むかで窯で焼かれた作品

2 藝大ヘッジの取り組み

本学の上野キャンパスでは、敷地の周縁に落葉・常緑の武蔵野由来在来種40数種類の苗木を、学生教職員、近隣地域の方々を含む一般市民とともにワークショップ形式により自らの手で植え付け、それを維持する活動を継続的にを行っています。

この取り組みは鉄柵を置き換えるかたちで毎年度少しずつ距離を伸ばし、今年度は通算で9回目となる「藝大ヘッジSeason8」として、音楽学部北西側エリアに植樹を実施しました。併せて列を増やし歯抜けを補うなどを行い、これまでに延べ約450m、約8500本余の植え付けを行うことができました。

花や新芽、紅葉など、四季の移ろいに応じて常に変化する様子は道ゆく人の目を楽しませてくれるだけでなく、訪れる蝶など昆虫の種類も増え多様性を育む場となっており、令和4年には新亜種の昆虫も発見されテレビの教育番組でも紹介されました。



植え付けた苗木は、お手入れ（水遣り、選択的除草、清掃、剪定など）の作業を有志学生参加の「お世話隊」により月に3回程度行なっています。今年度は近隣住民にも参加いただき、地域との交流が生まれる場ともなりました。構内には武蔵野原生林の面影を残す「保存林」と呼ばれる雑木林があり、同じくお世話隊の活動により林床保全に努めています。活動を通して収穫を楽しむなど、お世話だけでなく多面的に自然と対話する時間が得られ、学生の創作活動にも活かされています。ささやかでも継続的な活動を続けることによりキャンパスを豊かに美しく保つことができるという実践の機会ともなっています。



植樹ワークショップの参加者（令和5年11月実施）



「お世話隊」によるお手入れ活動の様子

この取り組みは、これまで多方面から多くの支援をいただき実現してきております。本学を縦断する道路部分での完成まであとわずかとなっており、引き続き植樹を延伸するとともに、持続可能な維持管理についても継続して取り組んで参ります。



藝大の森サイトURL
<https://geidaicgd.wixsite.com/geidainomori/>

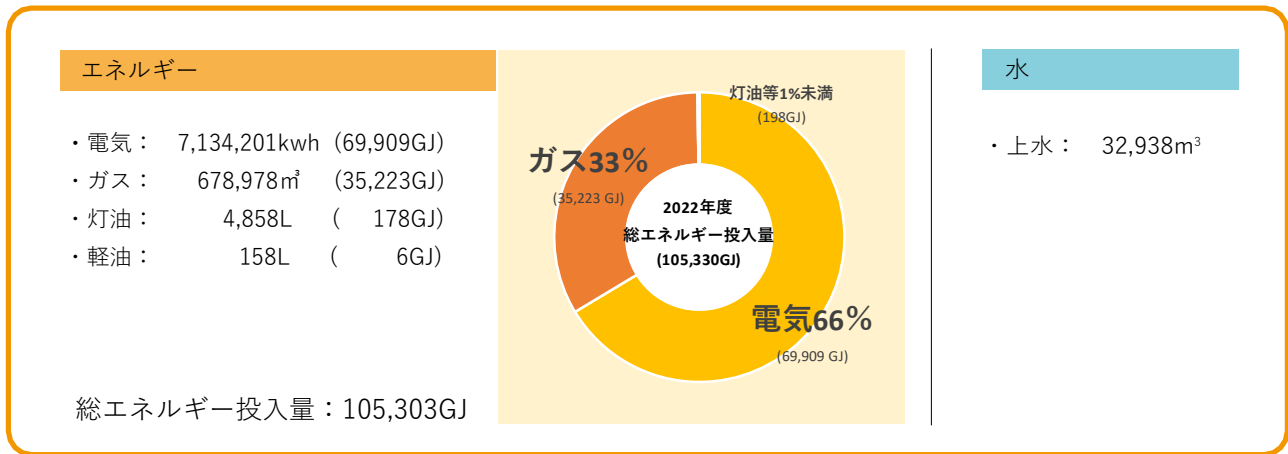
6 マテリアルバランス

大学は、電気、ガス、水などのエネルギーや資源を消費しながら教育・研究活動を行っており、廃棄物や二酸化炭素の排出など、様々な形で環境へ負荷を与えています。

本学では、過去5カ年の推移を確認し、増減の原因等を分析しています。

(主にエネルギーの使用の合理化等に関する法律に基づき報告した数値を採用しています。)

1 令和4(2022)年度のエネルギー・資源の消費と排出



input



output

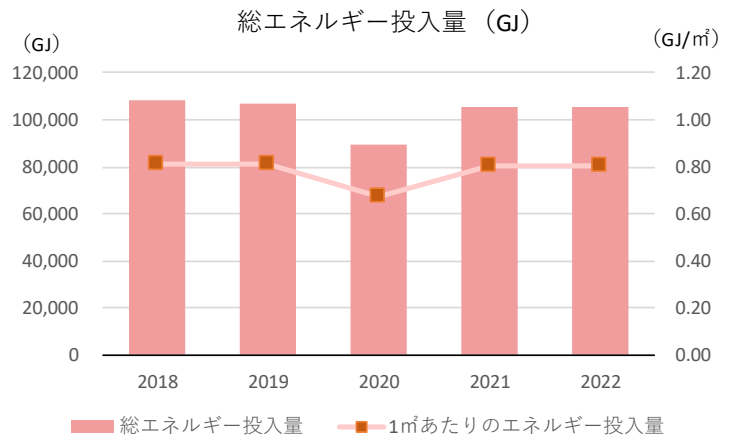


2 エネルギー・資源の消費と排出の推移

※令和2(2020)年度は、新型コロナウイルス感染予防措置として入構禁止や遠隔授業を実施していたため、各エネルギーの使用量が少なくなっています。

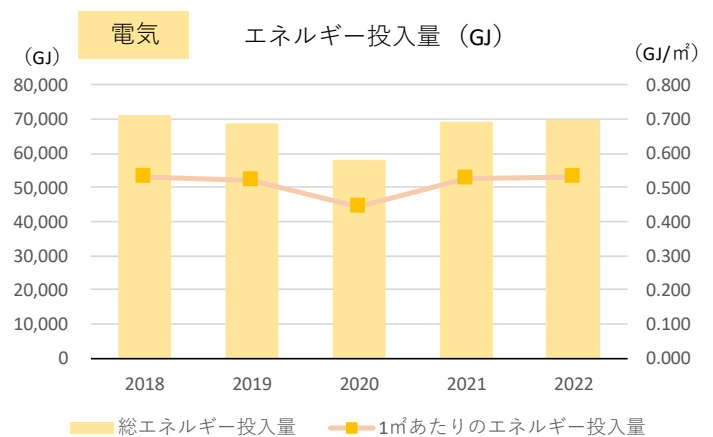
◆総エネルギー投入量

総エネルギー投入量は、105,330GJで、前年度比+0.2%の微増となっています。2018年度比では△3%で、全体としてはほぼ横ばいと言えます。



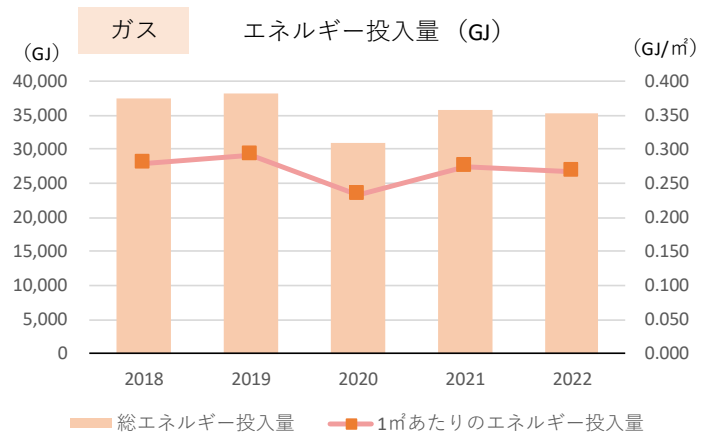
◆電気使用量

電気使用量は、7,145,201kwhで前年度比+1.1%増、2018年度比では△1.5%の微減で、全体としてはほぼ横ばいと言えます。



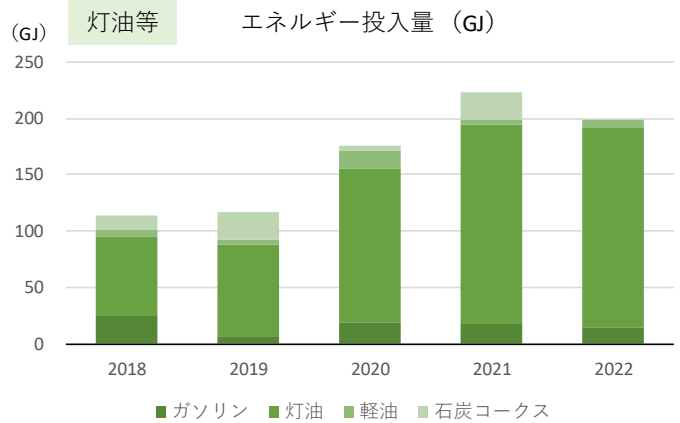
◆ガス使用量

ガス使用量は、678,978m³で前年度比△1.5%減、2018年度比では△9.8%の減となっています。



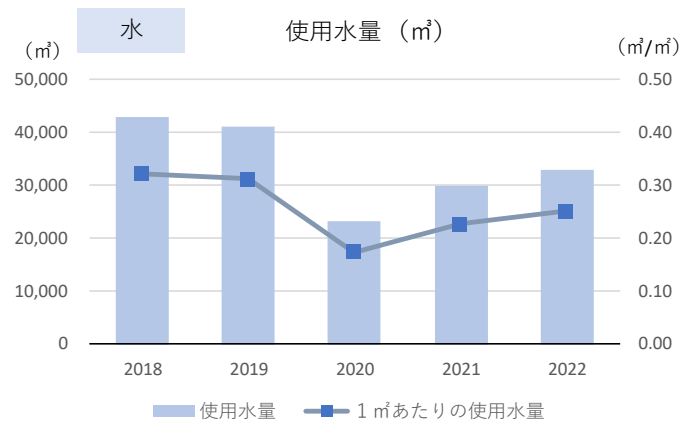
◆灯油等使用量

作業車両や重機、暖房器具等で使用されるガソリン、灯油、軽油、石炭コークスの使用量は、2018年以降増加の傾向にあります。



◆水資源使用量

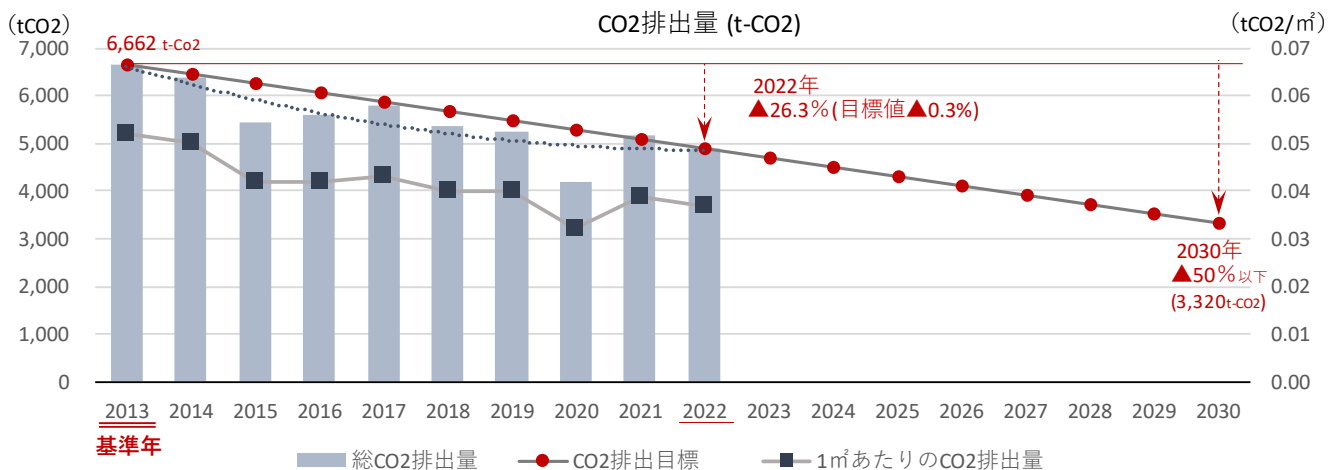
水資源使用量は、全体としては減少傾向にあります。2022年度は32,938m³で前年度比+10.6%の増でした。2010年代よりは減少しているものの、近年増加傾向となっています。



◆温室効果ガス (CO₂) 排出量

昨今、CO₂ 排出量の削減が世界規模での課題となっていますが、本学でもCO₂ 排出量の抑制に努めています。

2022年度のCO₂排出量は、2030年目標・2013年度比50%削減のカーボンハーフ達成に向けた当年度目標値より0.3%少ない4,912 t CO₂と、当年度目標を下回る数値でした。しかしながら、総エネルギー投入量は前年度より若干増えており、CO₂排出量を抑えることができた主な要因は、電力会社のCO₂排出係数の低下であることから、引き続き省エネに向けた行動をとることが必要です。



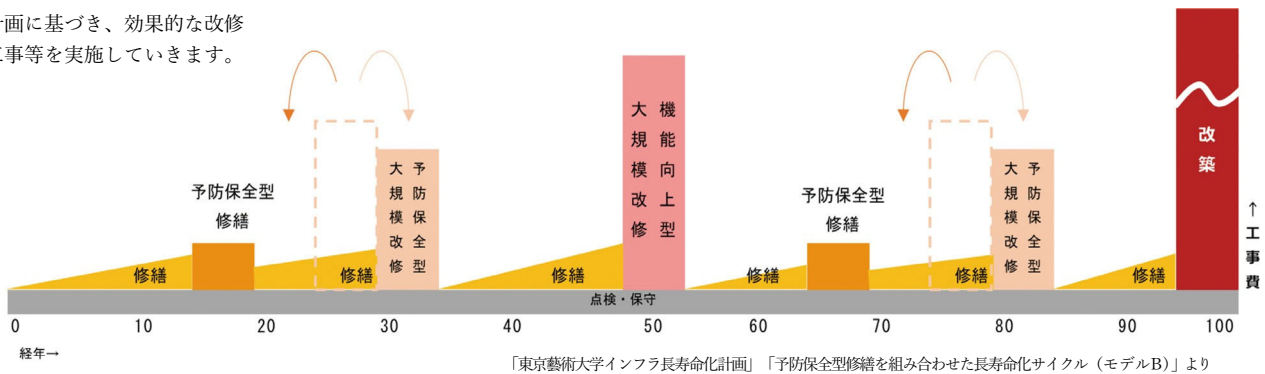
7 施設長寿命化への取組み

本学が管理する施設やインフラ設備を対象として戦略的な維持管理等を推進し、持続可能なキャンパスを形成することを目的に2019年3月にインフラ長寿命化計画を作成しました。

教育研究の基盤であり、財政への影響も大きい施設について、中長期的な視点で取組むべき事項を明らかにし、経営上のリスク軽減等につなげると共に、適切に手を入れることで施設の長寿命化を図ります。施設を長寿命化し、工事や建材の発生を抑えることで、環境負荷の低減につなげます。

図 7-1 インフラ長寿命化サイクルのイメージ図

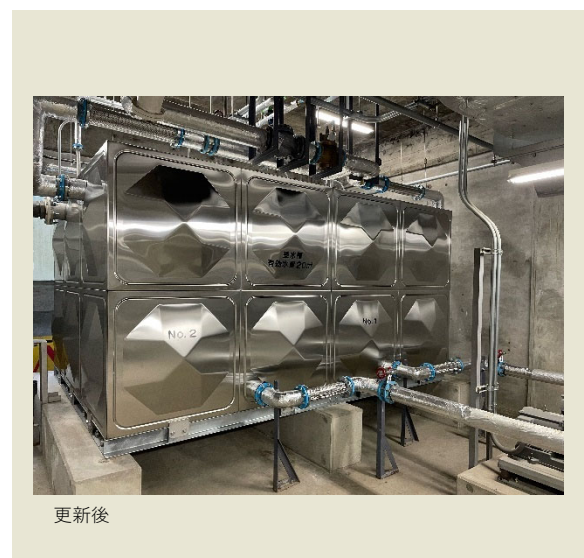
計画に基づき、効果的な改修工事等を実施していきます。



◆経年劣化した受水槽の更新を行いました

設置から34年が経過し劣化した受水槽の更新工事を行いました。

音楽学部敷地内に給水を行うための受水槽で重要な設備です。既存受水槽はFRP製のものでしたが、ステンレス製のものに更新し、耐久性・耐震性が向上しました。



東京藝術大学 環境報告書 2023

発行日：令和6年2月29日

企画・編集：

東京藝術大学キャンパスグランドデザイン推進室

東京藝術大学施設課

発行：国立大学法人 東京藝術大学

110-8714 東京都台東区上野公園12-8

イラスト：島田智世

江原若菜（東京藝術大学 大学院 美術研究科デザイン専攻）
